

## 芸術表現とは自分との対峙

ピアニスト **山下 晶子氏 (高校29期)**

1983年よりベルリン在住。

ベルリン芸術大学でピアノを、ベルリン工科大学で音楽学を学ぶ。

ソリストとして数多くのリサイタル、オーケストラとの共演ほか、室内楽奏者、  
歌曲伴奏者として、ベルリンフィル、シャローンアンサンブル等での鍵盤楽器  
奏者として、古楽から現代音楽まで幅広い分野で活動。

ドイツのみならずヨーロッパ各国、アメリカ、ロシアでコンサート、音楽祭に出演。

ベルリン芸術大学講師、ドイツ青少年音楽コンクール審査員。



私はドイツの首都ベルリンで、ピアニストとして生きています。

勤務しているベルリン芸術大学音楽学部には、ドイツのみならずヨーロッパ各国の一流のオーケストラで活躍することを目指す人たちのためのコースがあります。世界中からやってきて厳しい入学試験に合格した学生達は、育った文化も受けてきた教育もそれぞれ異なる個性豊かな人達です。この学生達を、伴奏者として一緒に演奏する事を通して指導するのが、私の仕事です。



バイオリンのクラスコンサートの後で

プロの演奏家として生きていくために必要な基礎的技術を身につけるというのは、簡単ではありません。楽器を弾く技術を習得するのはもちろんの事、自分の内面に目を向けていくことが常に問われるため、学ぶというのはどういう事か、苦手な事をどう克服していくのかといった問題を、個々の学生とじっくり話し合わなければならない場面もよくあります。楽譜をどう読めば色々な解釈の可能性が見えてくるのか、本番に向けてどう準備をすればいいのかといった事も、一緒に演奏しながら模索していきます。どうすればいいのか分かっていても、技術として習得し、実際に演奏に活かせるようになるまでには時間がかかります。コンサートや試験といった場で一つ一つ、繰り返し試しながら学んでいくしかありません。理解力や集中力だけでなく、創造性や好奇心、健全な自己批判能力といったものも問われます。私の役目は、一緒に演奏する学生達の心の中でまだ入っていない

スイッチがどこにあるのかを探り出し、本人が自分で入れられるように促すこととでもいうのでしょうか。長く取り組んできた課題の一つがやっとこなせた時、彼らはいつも素晴らしい演奏をしてくれます。その人が、その人であることで輝いている、実に説得力のある演奏です。芸術家としての資質というのは、こういった試行錯誤の繰り返しをどこまで追求できるのかにかかっているのです。

私はピアノを教えるのではなく、ピアノを弾いて生きていく道を選びました。大学の仕事と並行してフリーのピアニストとしての仕事もしてきましたので、こうしたプロを目指す学生達から、歴史に残る大指揮者に至るまで、数えきれない音楽家と共に演奏する機会を得てきました。そしてそこにはもちろん、聴衆がいます。演奏するという真剣勝負のひと時ひと時を、多くの人々と音楽を通じて共有していく、ささやかなりにも幸せな人生を送っていることに、いつも心から感謝しています。



ビオラの教授陣と